
闇蜥蜴《やみとかけ》【改定前版】

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やみとかげ
闇蜥蜴【改定前版】

【Nコード】

N 8 6 4 9 H

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

少年の故郷が魔王に滅ばされてしまった。魔王は強力な力を持つという闇蜥蜴^{やみとかげ}を蘇らせようとしている。少年は闇蜥蜴の復活を防ぐため、魔王よりも先に、4つの秘宝^{ガラクタ}を集めると誓う。滅びた故郷に別れを告げ、秘宝を求めて旅立った。

——そしてある遺跡に來た時、少年はスライムと出会い、なぜか二人で旅をすることになった。

一・暁闇の世界は、ときに現れ

大地に芽生えた一つの樹は空を網羅している。

太陽の沈みかけた空は、ほんやりと赤くにじみ始めている。それは、光と闇が交替する時間の訪れであり、毎日のように繰り返されている。

相反する闇と光が入り混じる空間は、何もかもを曖昧にしてしまう。時として闇は光に擬態し、光は闇に転じる。何が正で、何が偽か、もはや解らない。何もかもが、交じり合い、全てが風化していく。

昼と夜の狭間に渦巻く風は、草原を流れ、海原を駆ける。

樹々のざわめきと、草木の包み込むような香りが、子の髪を撫でていく。またこの不安定な宵闇が訪れつつあった。

子は、目を開いた。

子が触れている木の根には、かつての記憶が刻んである。

友人たちと、兄弟たちと、背比べをした痕。

夕闇と共に淡く消え去った過去の想い出。

子は、その傷に指を走らせる。

大木にまた一つ小さな水滴が落ちる。

子は、目を閉じる。

懐かしい情景が、ほんやりと浮かぶ。

晴れわたった空に漂うのは白い雲だった。

山の山頂は、まだ雪に覆われていた。草原にも、所々、白いものが残っていた。

日差しは柔らかく、地上を照らしていた。
木で出来た人家が見えてきた。小さな集落だ。
海からの風がどこからか、樹華の香りを運んできた。

「僕の……故郷」

一歩踏み出した。

柔らかい土に肢跡がつく。集落は、太陽の光に包まれているように見えた。

もう一歩、踏み出した。

肢元の泥の大地に、新しい芽いのちが輝いていた。
子は、手を伸ばしそれに触れようとした。

……

赤い水滴が滴り落ち、芽を塗りつぶした。
顔を上げた。

あちらこちらで、赤いものが現れ始めた。

暁闇の鼓動……

赤い染みは、広がっていく。家も、平原も、空でさえも飲み込んでいく。

その赤黒い水溜りの上に人が浮かんでいるのを見た。

……

後退りする。

それは、見覚えのある容かたちをしていた。

似たようなものが、同じように転がっている。

……全て、赤い……

これは、悪夢だ……

夕焼け空、草の香りの下。

眼を閉じると、いつも同じ風景が、風に乗ってやってくる。
耳を澄ますと、やがて同じ言葉が、遠くから聞こえてくる。

、タスケテクレ、と。

みんな、いなくなってしまった。
赤黒い人影たちは、口々に言う。

、……タスケテ……、

呪文のように、彼らは、その言葉を繰り返していた。

、……タスケ……、

その言葉をかつて、聞いたのだ。

その言葉が、夢の中までも侵入し、苦しめる。

赤い記憶の呪われた夢。

突然の闇が羽ばたくように深く舞い上がる。

赤い闇の中で、ただ一人だった。

樹の間から見える空は、湖面のように静かである。

群れをなした純白の鳥が澄みきった空を横切る。おそらく、森の
巢へ帰って行くのだろう。

帰る場所があることは、いいことだ。

湧き上がる、この感情は子にとって、邪魔であった。子の帰ると
ころはもうない。

淡い風景の中を、子は覚束無い足取りで歩き出す。

それは、静かすぎる暁闇の夕暮れであった。

二・広大な空は、ときに悲しく

鬱蒼とした針葉樹の密林が風に揺らされる。右へ左へと、波打つように。

太陽は沈み、辺りは暗い。

空は黒く厚い絨毯に覆われている。獣のような唸り声が、響いている。

空が瞬間的に白く煌く。闇の中にあつた山の稜線をくつきりと浮き上がらせた。

淡紫の雷光が天を裂き、轟音と共に一本の樹を貫いた。それが合図だった。

一滴の水が落ちてきたかと思うと、雨は地を激しく打ち始めた。風はますます激しくなり、木々が悲鳴をあげる。普段はおとなしい大河も次第に透明感を失い、波打ちながら渦巻く。大量の泥水が植物、動物を根こそぎ飲み込んだ。それはほんの一瞬のことであつた。

ニルヴァは、ひとり、雨宿りしている。

故郷を離れてどれくらい経つだろう。魔物に占領され、故郷が滅ぼされてから……

魔物の長の名前は、邪狗^{ジャグ}。自分の名の前に魔王という文字を付加し、各地に魔物を送り込んだ張本人である。

実を言えば、邪狗は封印された闇蜥蜴と会話し、封印を解くことを約束に、力を授かっただけの成り上がりの魔王である。

邪狗はニルヴァの故郷に拠点を置いた。

風の噂によると、邪狗はそこで、闇蜥蜴の復活の儀式を始めらしい。

ニルヴァの故郷は水に囲まれており、その場所に行くには船で渡るか、空から行くか、それとも子供がやっと通れる抜け道を通る以外に、方法がないのだ。魔王城を設置するには好都合な場所なのである。

どこから聞きつけたのか、ニルヴァの故郷にやってきたのだ。

自分の拠点を建てる。そんなことのために、ニルヴァの故郷は、魔物の手によって、滅ぼされてしまったのだ。

ニルヴァは、占領された故郷を取り戻したかった。

いや、故郷を滅ぼされた怒りの感情を、悲しみの叫びを、魔物を追い出し故郷を取り戻すという自己満足にも似た目標を達成するという復讐に、捻じ曲げなくてはなくては、生きていくことに耐えられなかったのだ。

故郷を救うとか、敵討ちとか、よくある旅立ちの理由である。

さらに付け加えると、彼は普通の人だった。しかも、村でのんびりとしている人のようにごく一般的な外見であった。これも、よくある設定である。いや、よくあるからこそ、彼は希望を持ったのだ。

ニルヴァは特に闇蜥蜴の運命を左右するという四つの秘宝「ガラクタ」を捜していた。

四匹の蜥蜴が持つという「ガラクタ」をその魔物たちより早く集めれば、ニルヴァの使える唯一の呪術で何とか闇蜥蜴に対抗できると思っていた。

四匹の蜥蜴は、遺跡に住んでいる。実体を持たない生命体。

闇蜥蜴と同じ次元の蜥蜴。しかし、世界を守る、いわゆる闇と対を成す光の存在。火、水、風、地の化身。

彼は、そのことを知っていた。彼だけではなく、この世界に生きる人なら、誰でも知っていた。

蜥蜴たちは、遺跡を転々としている。それを見つけ、会うのは難しい。

そう、彼が様々な遺跡を廻っている理由はそこにある。

ニルヴァは、闇蜥蜴を復活させないために、四匹の蜥蜴を見つけるために、遺跡を廻っていた。

目的の遺跡まで、もう少し。

この嵐がもう少し弱まるまで、夜が明けるまで、この高台の大木の陰で休むことにした。

三・降り注ぐ雨は、ときに厳しく

そう、ここは、崖の先端にほど近いところにある遺跡だ。

そびえ立つ白亜色の遺跡は、違和感なくその場所に建っていた。手の届くほど近くに空がある。高緯度にあるこの遺跡全体は、別名空中都市と呼ばれている。

崖の上に建てられた遺跡。響きは良いのだが、実際にはいくつかの小さな祭壇があるだけの比較的小さな遺跡だ。

噂によると、ここに蜥蜴が立ち寄ることがあるらしいが、それを除けばただそれだけの遺跡なのだ。

この遺跡は所々に開く穴からは外の景色を望むことができる。

外の景色は崩れかけた建物の瓦礫と、名も知らぬ草樹にはさまれた路が広がっている。

耳に届くのは雨と風と波の音。この遺跡は、海の近くにあるのだ。望むことのできる静かな海は、何十億年もの間、絶えることなく大地に打ち寄せていた。

生命が絶滅しようとして、魔法大戦が勃発しようとして、魔王が現れようと、決して変わることなく。

飛び込んだ空間には、祭壇があった。その祭壇の上には、巨大な灰色のがあった。特に目立つ装飾も無く、それはその場所にあった。

今度こそは、何か見つかるような気がしたのだ。

この遺跡には、なにか不思議な気配が漂っていたのだ。

高鳴る胸の鼓動の音を聞きつつ、ニルヴァは、壺を覗き込む……

壺の中は、ただ、灰色の暗闇が続いていた。

ニルヴァは、思わずあたりを見回した。

静寂を揺るがす水音が、微かに聞こえるだけであった。
なにもない……殺風景である。

記憶の積み重なるこの空間は、時さえも遺物として、止まり続けているように見えた。

ニルヴァは、舌打ちした。

世の中が上手くいかないというのは、このことだろう。目的のものが、そう簡単に見つかるとは思っていなかった。

しかし、これも難しいものだとはい、現実には、非常に厳しいものである。

ニルヴァは、引き返そうとした。

その時、なにか刺すような視線を感じた。これは、殺気。

ニルヴァは、気配のする方を見る。

柱の陰、暗がりには赤い瞳が光る。それは、魔物だ。

「なんだ、餓鬼か……」

そう言いながら、頭に2本の角が生えた魔物が現れた。
殺気みなぎるその魔物はどう見ても、人間に対して友好的な感情は持ち合わせていないだろう。

「魔王様に頼まれた、仕事も終わって、丁度、腹が減ったところだ。
食ってやるう……」

にやりと笑う。

残酷な笑み、いたぶって、弄って、絶望の中に沈めてから……魔物は、獲物をどう調理するか考えているようだった。

ニルヴァは身構える。魔物1匹くらいなら何とかなるかもしれない。

「くくく、そうでなくては、狩りは楽しくない」

この魔物にとって、抵抗なき狩りは、つまらないのだ。それこそ極上の娯楽。

魔物は長くしなやかな尾をニルヴァ目掛けて、振り下ろした。ニルヴァは、難なくその攻撃をかわす。

ニルヴァは態勢を低くし、魔物の肢を斬りつけた。しかし、その攻撃は、あたったものの強靱な肉体の前では、たいした傷にはならなかった。

勝負は五分五分であった。

幾度目かの火花が散ったとき、二人の動きが止まった。

彼らは、動かなかった。お互いの力が均衡を保っていたのだ。

それは嵐の前の静けさに似ていた。

しかし、勝負というものは、一瞬にして決まってしまうものだ。

……沈黙を破り、先に動き出したのは、魔物の方であった。鋭い爪を振りかざし、ニルヴァを斬りつけた。

ニルヴァは、再び飛び退く。

しかし、魔物はその動きを予測していた。

すばやく態勢を立て直し、ニルヴァ目掛けて再び爪を振るった。

ニルヴァは、その攻撃に遅れながらも反応した。爪は、ニルヴァの服を裂いた。血が、服ににじみ出た。

「……くっ」

ニルヴァは辛うじて、急所を避けた。しかし、膝をついている暇はなかった。

魔物が再び動き出したのだ。

魔物は突進する。

避けようとしたものの、突き出た角の攻撃を食らってしまった。その反動でニルヴァは、壁にぶつかつた。

口の中に液体が広がるのを感じた。

口の中を切つたらしい。鉄のような錆付いた味、あまり良い味とはいえなかった。

……勝てそうにない。

ニルヴァは生命の危機を感じた。

立ち上がろうとして、ニルヴァはふらついた。受けた衝撃は思っていたより、大きかったのだ。

偶然にもふらついた手の先には、天井から垂れる紐があった。

ニルヴァはそれを引いてしまった。

「ウピュー」

奇妙な声と共に、上から、スライム液状生命体が落ちてきた。蒼い生命体は何回か弾んで地面に着地した。

「いたいピュ」

現れた生命体は、手らしい器官で頭をなでる。

「フォーゼの優雅な昼寝のジャマをしないで欲しいピョ」

ニルヴァは見上げた。紐で簡単にこしらえた寝網ハンモックが揺れていた。この生命体は、そこから落ちたらしい。

液状生命体とは、あんな物で寝るのだろうか？むしろ、液状の身体なのに、穴だらけの寝網に、本当に寝られるのか気になった。

もしかすると、ニルヴァが思っているほど、液状生命体の身体は、柔らかくないのかもしれない。

ニルヴァは思ったことを口に出した。

「こまかいことは、気にしないっピョ」

液状生命体のフォーゼは、飛び跳ねた。この生命体はどうやら人に慣れているらしい。人に対する敵意は感じなかったのだ。

フォーゼは、ニルヴァの肩を見た。

「ケガしているっピョ！」

そして、辺りを見回し、そこにいた魔物の姿を見つけ、こう叫んだ。

「ウピヤー、それに、顔が大きいマモノさんっピョ！」

その言葉のおかげで、ニルヴァは液体の魔物と話している暇がないことに気がついた。

ニルヴァは魔王の手下を見た。

魔王の手下は、液状生命体の『顔の大きい』という言葉に、反応していた。動きが止まっている。

きつと、顔が大きいことに対して、劣等感を持っていたに違いない。

我に返り、『人が気にしていることを、よくも!』と、突進してくる前に、逃げよう、ニルヴァは考えた。

考えついたら、そこからが、早い。ニルヴァは、フォーゼを抱え、崩れた石像隙間を潜り抜け隣の部屋へ逃げる。これで、多少は、時間稼ぎにはなるだろう。

「おい、こら、待て。逃がさんぞ! 捕まえて、まとめて食ってやる。気にしていることを、よくも!」
逃げるニルヴァたちに魔物が気がつき追いかけてくる。

ニルヴァはさらに奥へ、上へと進む。
背後の柱が、魔物の頭突き of 振動により、崩れ落ちる。
外にある遺跡ほど風化が激しいものである。この遺跡も例外ではないようだ。

足や腕を、傷だらけにしながら、ニルヴァは上っていく。
遺跡の屋根の上に来た。
崖の上ということもあり、地上までの距離が遠かった。そして、
天空の世界に、一番近い場所であった。

まだ、たくさんの雨粒が空から地上に降り注いでいる。嵐はおさまりつつあったが、雨風はまだまだ強い。
水はけの悪い灰色の地面には、すでに小さな川ができていた。
水の臭い、湿った空気は故郷を思い出す材料になるのだ。

そう、故郷が滅んだ時も、雨が降っていた。故郷に出来た水の川は赤かった。生暖かった。
あの状況では、死んでもおかしくなかった。

しかし、今、こうして生きてここにいる。これも、運命の一つだろう。

でも、でも、また、魔物がいる。魔王の手下の魔物が来る。

「……もうだめかもしれない」

今はもうない故郷。あの青い海と、白い雲と、緑の嶋と……。

ニルヴァは、この故郷から離れた場所で、一人死んでいくことを悲しく思った。

「しっかりするっぴー！」フォーゼは、ふるふる揺れながら、言う。

「何かを恐れていては、何もできないっぴ」

絶望にうな垂れるニルヴァの目の前で。

「……って、おいらのパパが昔言っていたっぴ」

やはり誰かの受け売りだった。

しかし、今のニルヴァには心強く思えた。

再び、遺跡が揺れる。

脆い屋上の床の石が崩れ、ニルヴァたちはその歪の中へ滑り落ちた。

「今日は落ちてばかりっぴヨ……」

ニルヴァ達が落ちたすぐ近くには、青い鱗を装飾としてあしらった壺があった。

つい昨日まで、儀式に使われていたようなどこもひび割れていない、新しい壺であった。

遺跡に漂っていた、先ほどから感じていた不思議な気配は、この壺からのものだったのだろうか。

この壺を調べれば何か蜥蜴の手がかりが見つかる可能性もあった。

しかし、しっかりと封印がなされている鱗の壺は、ニルヴァの力では紐一つ解くことは出来なかった。

「見いつけた」低い声が聞こえる。

その言葉と共に、ニルヴァは我にかえった。
ニルヴァは、今置かれている危機的状況を、すっかり忘れていたのだ。

現実逃避も、ここまで来ると、もはや天然、もはや天才的である。

……とうとう、魔物に追いつかれてしまった。
ニルヴァは、逃げ道を探すべく、後退りした。

一方、フォーゼの方は、まだ魔物に気がついていない。

そもそも、今が危機的状況ということを理解していないようだ。

ただ、ツボの下の方の一点を見ていた。

低い目線でないと見つけれない場所、形を変えられる液状生命体ではないと押せないような奥まったところにある、押せそうな出っ張りを見つけたのである。

出っ張りという物は、その存在自体が「押してしまいたい欲求」をかき立てる。

フォーゼは欲望に忠実に、その出っ張りを、押した。

一瞬の沈黙を過ごした後、「かちり」と音が響いた。ツボにひびがはいる。

ヒビから青い液状の物質が、でろりと漏れ出た。

「き、きもち悪いッピョ……フォーゼは、何もしてないッピョ……」
同じような形状をしている液状生命体は一人とぼけていた。

誰も気づかぬこの状況下、このフォーゼの行動が、ニルヴァの命を助けることになる。

三・降り注ぐ雨は、ときに厳しく（後書き）

個人的に、喋るスライムは人間に対して交友的な魔物だと、そう勝手に思っています。

某ゲームの影響ですね（笑）

シリアスなものをあまり書いたことがないのですが、

今回、書いてみて分かったこと、まじめな（？）戦闘シーンは苦手だということ。

結構、疲れました。

それはそうと、ニルヴァ……記憶力というのか、集中力ないなあ。と、書きながら思っていました。

魔物の存在とか逃げていることとか、忘れちゃうんだもの。現実逃避の達人だね。

四・揺れる水は、ときに鋭く

ニルヴァと魔王の手下は睨みあったまま動かない。

「もう逃げ場は無いぞ」

魔物は突き出る牙を見せた。

その口によって、何人もの人が彼の胃袋に送られただろう。

ニルヴァは目を閉じ、最後のときを待った。人間、時には断念が肝心だ。

しかし、次の攻撃が繰り出されることはなかった。

ニルヴァは、片目を開いた。

ニルヴァの目に映ったのは、膝をついた魔物の姿であった。

そして、その瞬間、とどめとばかりに水の刃が魔王の手下を裂く。その刃は上級魔術師の繰る魔術である。

「そ、ン、な、馬鹿、な。蜥蜴の封印が解けるなんて……」

ニルヴァは、壺が割れていることに気がついた。

先ほどフォーゼが割った壺、あれが封印の壺だったらしい。

「こんなに簡単に封印の壺が割られるなん、て……」

すでに影が薄くなりつつある魔物は、前脚こぶしを床に打ちつける。

「くそおおおお……」

灰の山が、風に吹かれて崩れていくように魔物の姿は消えていった。

そう、生命の火が消えた魔物は何も残さず消えてしまうのだ。

その現象と入れ違いに、魔法を放ったと思われる光がニルヴァに

近づいてきた。

それは徐々に輪郭がはっきりとしてくる。

ニルヴァの背丈3倍は有ろうかという碧色の蜥蜴が、今その姿を現した。

「われは……水をつかさどる蜥蜴。……闇蜥蜴の使者のかけし封印を解いた者達よ、礼を言うぞ」

伝説の蜥蜴が目の前にいる。

ニルヴァは、声をかけようと口を開いた。

しかし、碧蜥蜴にはニルヴァの言おうとしていた事を知っていたようだ。

「言わずとも分かっている」

碧蜥蜴は、魔物の消えた辺りから手の平ほどの大きさがある、黒い角を拾い上げ、ニルヴァに手渡した。

蜥蜴から渡された「ガラクタ」は、湾曲したその角のよう。それは、鋭く、まるで遺跡から出てくる剣の形に似ていた。

「お主はこれが欲しかったのだろう？危うく闇蜥蜴の使者の手に渡るところであつた……」

どうやら、魔物に「ガラクタ」を奪われて、つばに封印されてしまっていたのだ。

ニルヴァは碧蜥蜴を見上げた。意を決し、この碧蜥蜴に鱗を貰えないか交渉した。

碧蜥蜴は戸惑いながらも、腕の鱗を一枚ニルヴァに手渡した。

「……お主なら、大丈夫かもしれん」

意味ありげな言葉を言うと、碧蜥蜴は消え去ってしまった。

全ては蜥蜴のみ知るというやつだ。

「何で、ウロコをもらったピヨか」

いつの間にかニルヴァの隣にいたフォーゼ。ニルヴァの奇妙な行動を不思議に思った。

ニルヴァが蜥蜴の鱗を欲しいと思ったのは、鱗には魔力が宿っているからであった。

生物の頂点に立つ生物と考えられている蜥蜴の物となれば、それは「ガラクタ」に匹敵するほどである。

御守り代わりに、ニルヴァは記念にそれが欲しかったのだ。

「記念につて、ニルヴァ、変ピヨ」フォーゼは即座に呟いた。

実を言うとフォーゼにも鱗がある。液状のために目立たないだけなのである。

フォーゼは自分の鱗が欲しいと言われたら困るので、絶対にニルヴァに言わないと心に決めた。

四・揺れる水は、ときに鋭く（後書き）

4の秘宝^{ガラクタ}の1つ目入手です。

ガラクタという言葉は、壊れているような感じと雑多な印象の語感が、素敵な響きだと思っています。

五・草原の風は、ときに揺らめき

旅というものは、道連れがいたほうが良い。例えそれが、異種族だとしても。

お互い、知らない世界のことについて語りあえる。

魔物は魔物の、人間は人間の、それぞれの生活を。

外の世界で常に暮らしている魔物は、いろいろ知っていた。

町の中のことしか知らなかったニルヴァは、魔物の生き方について興味を持った。

フォーゼも、きっと同じだっただろう。

一人と一匹は、遺跡を廻るたびを続ける。

今回探索する遺跡には、目的のモノがあるのだろうか……

日が昇っているうちに探索できる範囲に、限りがあったこともあるが、

子供であるニルヴァが、この遺跡を探索するには、あまりにも巨大な遺跡であった。

遺跡の奥深くに着く頃には、日も暮れかけてきた。

あと、数時間もすれば、すっかり闇に包まれてしまうだろう。

廃墟ともいえるこの遺跡にはなぜかこんな噂がある。

夜になると屍骸アンデットと呼ばれる魔物が闊歩かつぽするらしい。

大量の人骨が発見された場所という理由によるものだろう。

「こ、こわいピヨ……」

どうやら、魔物でも、屍骸は怖いらしい。

しかし、屍骸は、見たことある人が限られているのが特徴である。能力がある人には、簡単にその存在を感じることが出来てしまう

らしい。

有って無い者とも呼ばれる屍骸は、ニルヴァはまだ見たことが無かった。

この世に存在するかどうかも怪しいものである。

「そういうニルヴァも、ふるえているっピョ……」

怖いものは、やはり怖いに決まっている。

風の音しか聞こえないこの空間は、生命が居てはいけないような雰囲気だった。

清々しいはずの草の香りも、崩れた建築物の中を吹き抜ければ、水気の無い砂埃と共に舞い上がってしまう。

この遺跡の過去は闇蜥蜴を呼び出し、繁栄した古代都市である。

蜥蜴の力を使い、この都市を造りあげた。

どの建物も硝子と呼ばれる透明な石が窓にはめ込まれ、夜でも部屋の中は昼のように明るかったという。

しかし、この繁栄は、突然終わってしまった。

闇蜥蜴によって、この都市は滅んでしまった。闇蜥蜴は、やはり、破壊しかもたらさない。

この廃墟はそう物語っていた。

今、邪狗はその闇蜥蜴を、蘇らせようとしている。

邪狗が闇蜥蜴の力を持て余し暴走させ、自ら滅ぶことにならないかなという、

どんな賭け事よりも当たりがくる確率の低い現象が起きないかと思っただのも事実である。

遺跡のあちらこちらに見ることが出来る記号文字は、伝説を語っている。

闇蜥蜴復活のための儀式とその歴史などが刻まれている。

ニルヴァには、解読不可能な専門用語や、幾何学図形の方が遥かに多い。

だいぶ日も落ちてきた。

そろそろ寢床を探し始めようと思いはじめた矢先、少し離れたところで、煙が上がっているのに気がついた。

耳を澄ませば、爆音にも似た音が聞こえた。

誰かが、戦っているような、そんな雰囲気だ。

ニルヴァは、そつと、その場所に近づき、覗き込んだ。

そこには巨大な蜥蜴が、いた。何か大量の黒いものに襲われている。

蜥蜴は、風をまとい黒いものを蹴散らしているが、それは、勢い衰えることなく次から次へと、現れる。

誰かが、異世界から延々と召還しているに違いない。

その様子に、生理的に、背筋が震える。

生命の危機と言うほどではないが、言葉ではうまく表現できないぬめりとした恐怖を感じるのだ。

「気持ち悪いっぴ」

フォーゼも、同じことを思っているらしい。

この感情は、魔物も人間も基本的には、変わらないのかもしれない。

しかし、とにかく、蜥蜴を助けなくてはならない。

どこか近くに、あれを操っているものが、いるはずだ。

ニルヴァは、注意深く観察する。

黒いものの流れは、不規則ではあるが、ある一点から、はじまっている。

あの柱の影、その近くに術者はいるはずだ。

「フォーゼは、ここで、待ってて」

もしも、彼が敵ならば（ほぼ間違いなく敵だろうが）、その時は戦いになるだろう。

戦闘においてフォーゼは、足手まといでしかないのだ。

柱の影が見える位置まで、移動する。

いかにも闇の者が好んで身にまといそうな黒いローブ姿が見えた。尖った耳、服の裾からのぞくしっぽ……

到底、人間には見えない魔の者の姿。間違いなく魔王の手下であった。

彼は、蜥蜴に夢中で、ニルヴァの存在に全く気がついていない。今なら、奇襲できるかもしれない。

幾分か、戦いに慣れたと言っても、もともとは普通の村人であったニルヴァにとって、戦いは、常に命がけ。

どんな卑怯な手をおうと、勝つためには、手段は選んでいられないのだ。

ニルヴァは、意を決した。

剣を構え勢いよく、しかし、気配や音を殺しながら、一気に襲い掛かった。

他の力に頼って隠れて戦う者は、接近戦には、向かないことが多い。

しかも、不意打ちと言うこともあり、勝負は、一瞬でついた。魔力の供給を失った黒いものたちは、一斉に空気に散っていく。

消え行くものを眺めつつ、事の成り行きを全てを悟った、蜥蜴が、ニルヴァのもとに寄ってくる。

「われは、風をつかさどる蜥蜴なり。……煩い輩を、追い払ったことに礼を言うぞ」

蜥蜴は、続けて、言う。

「噂は、風から聞いておるぞ。『ガラクタ』を集めている者が、近いうちにここを訪れることを。」

助けてくれたお礼じゃ、これを受け取るが良い」

この「ガラクタ」は白銀で出来た首飾りである。扇状の装身具は見方によっては翼のようにも見える。

ニルヴァは、蜥蜴に鱗を一枚貰えないかと、ついでに交渉してみた。

「また記念にピヨか。ニルヴァも好きッピヨね」

一回集めだすと、全種類集めたくなるのが、収集家の定めと言うのか、言わないのか。

これで、「ガラクタ」は二つに、鱗も二枚となった。

五・草原の風は、ときに揺らめき（後書き）

遺跡や蔵の中から出てくるものは、使い道や価値がなければ、ただのガラクタも同然なんです。

興味がない人にとっては、どんな価値があろうとガラクタはやっぱりガラクタです。

六・乾燥した大気は、ときにざわめき

この遺跡は、魔王が現れる前までは遺跡観光の恩恵を受けていた。土産品を売っていた店や、案内看板がその過去の賑わいを物語っていた。

しかし魔物が現れた今、訪れる観光客はない。

神殿は、天井が高く塔のようであり、無機物な墓標にみえた。絡みついた植物の細い茎は、先端に行くほど褐色が強くなっている。

弱々しい植物は、海からの風に揺らされ、乾いた音をたてる。

神殿の内部は、昼間でも薄暗い。

苔が、敷き詰められた絨毯のように生え、ますますこの空間を、光の世界から遠ざけている。

筒型の壁に沿うように、螺旋階段が上にも下にも伸びている。

上のほうに続く階段は、屋上へ出るためのものであり、ニルヴァアにとっては、何の意味も無かった。

その神殿の一番奥。

昔、儀式を行うための広間に何か赤く輝く巨大な生き物がいた。

その口もとに並ぶ牙や、手足の爪は鋭く、赤い鱗は燃え上がるように赤い。

炎の化身と言われる蜥蜴だ。

突然に現れたニルヴァアに驚いたのか、蜥蜴は何も言わずニルヴァアに向かって突進してきた。

身体の高い蜥蜴の動きは、容易に予測がつき、ニルヴァアは、苦もなくその攻撃を避ける。

攻撃の当たらない蜥蜴は大きく息を吸う、それは、火を吐く合図である。

ニルヴァは、とっさにフォーゼを抱えその攻撃を避ける。

フォーゼの歩く速さは、お世辞にも速いとはいえないのだ。

ニルヴァは、間一髪、柱の陰に隠れる。

蜥蜴の発する炎によって発生した砂煙が巻き上がった。

「アツイっピヨ……」

腕の中で、フォーゼが溶けかかっている。

液状生命体は、熱に弱い者がほとんどである。

炎の熱は、フォーゼの身体はおるか、ニルヴァの体力も奪っていく。

早く何とかしないと、いけない。

ニルヴァは、砂煙に紛れ、柱を登り、蜥蜴の頭上に移動する。

相手の視界が遮られているうちに意外な場に移動する。

とても単純だが、よく使われる戦術である。

ある程度の高さまで登ったニルヴァは、「ガラクタ」を握り締める。

最初に蜥蜴からもらった鋭い角のような形をした「ガラクタ」だ。

「ガラクタ」は魔法の産物なので、そう簡単には壊れることはない。

落下の力を利用して蜥蜴の頭蓋に突き刺す。

蜥蜴は、咆哮をあげ、身体が地に崩れ落ちる。

「やっつけたっピ？」

「たぶん」

ニルヴァは、動かなくなつた蜥蜴に近づく。
蜥蜴から、生命の反応はなかった。

「……これで、よかったのかな……」
急に襲われたとはいえ、命を奪ってしまったのだ。

蜥蜴は、自然の化身。

もしも、仮に命を失つても、またすぐに新しい体、新しい記憶を得て、復活する。

基本的に、死による消滅と言う概念は存在しない生物。

そう知っていたとしても、やはり、死と言うものを目の前にする
と、複雑な気分になる。

蜥蜴の傍らには、何かが落ちていた。

これは、間違いなく蜥蜴の持つ「ガラクタ」に違いない。

ニルヴァは「ガラクタ」を拾うついでに、落ちていた蜥蜴の鱗も
拾った。

それは、赤く煌いており宝石のように美しかった。

「死体の中でも、記念にほしいピヨか……」

フォーゼは、人間という種族に奇妙な習性があることを改めて知
った。

六・乾燥した大気は、ときにざわめき（後書き）

今はガラクタでも、長い年月を経れば、

ガラクタではなく芸術品になったり、学術的価値が出たり、意外な使い道があらわれたりします。

今は、ガラクタでも、いつの日か、注目される日が……くるのかな。

多分、次回の更新しばらくかかると思われます。

七・静寂の記憶は、ときに彷徨い

蜥蜴の伝説は、誰でも知っている。

4つの「ガラクタ」は闇蜥蜴復活の鍵を握るものであり、4つ集めて初めてその力が発動する。

すでに、ニルヴァの手元には、3つの「ガラクタ」が集まっている。

魔王の手下もこの「ガラクタ」を狙っているはずなのだが、何の音沙汰も無く、大人しい。

道中も、これといって、順調。

おそらく、ガラクタをニルヴァに、全て集めさせる気なのだろう。そして、どこかで、こっそり監視していて、隙あらば、奪っていくに違いない。

ニルヴァは、道具袋を奪われないよう、常に注意していた。そのおかげか、今まで、何も起きていない。

このまま、何事も無く4つ目のガラクタも手に入れたいものだと、ニルヴァは思う。

「ここに、蜥蜴がいるらしいよ」

ニルヴァは、町で仕入れた情報を元にこの遺跡までやってきた。

「あんまり、大きくないツピね」

「大半が地下に埋まっているらしいからね」

今回訪れている遺跡は、地上にはほとんど残っていないのだ。

「ウピュー。底がみえないツピョ……」

地下深くまで降りていく階段を覗き込む。明かり無しでは、到底歩けそうも無かった。

ニルヴァは、道具袋から木で作られた棒状の物を取り出した。

この道具で火をつけるのだ。点け方は、いたって簡単である。ちよつとざらざらした感じの板に擦る。すると、火がつくのだ。

「マホウの道具ピヨ！すごいピヨ！」

魔物にとっては、この炎の道具は、魔法の道具に見えるらしい。

ニルヴァも初めて見たときは魔法かと思った。

「正確には、魔法ではないんだけどね……」

ニルヴァは角型の手提げ灯を取り出すと、火を移した。

光があるだけで人は安心し、安全なような気がしてくるのだ。

実際には、そうなるのは精神面においてだけであり、どちらにしろ先は闇なのだが……

長い長い螺旋の階段を下りていくと、行き止まりの部屋に出た。部屋の中央部の床には、魔方陣が描かれている。

長年使われていないようだが、まだ魔力は残っているらしい。

微かな光を放ちながら、来訪者を待っている。

「これは、場所移動の魔方陣だね」

遺跡探索をする以上、多少の魔術の知識が必要なのだ。

基本的な魔方陣の知識は、頭の中に入ってる。

この手の魔方陣は、中心に乗ることで、その魔力が開放される。

「行こうか、フォーゼ」

一人と一匹は、魔方陣の上に乗った。

空間が縦に伸び、横に伸び、そして、渦を巻く。それともない、浮遊感が襲ってくる。

空間の歪みが収まると、そこは、硝子張りの空間であった。その壁は氷のようにも見える。

いつのまにか、不思議な空間にたどり着いた。

「動物さんが、たくさんいるツピヨ」

確かに動物達がいた。

しかし、どの動物も凍りついた硝子の中に閉じ込められている。皆、眼を瞑り、膝を抱えたような格好で、眠りにについている。

ここは氷の中に閉じ込められた生物達の標本博物館のような雰囲気である。

ここは失われた都市、研究所。

ニルヴァは、光に浮かぶ記憶の都市、幻想都市の伝説を思い出していた。

幻想都市には封印された生物達の精神や魔力が陳列されているのだ。

ここには凶悪な魔物もいれば、平和をもたらす神獣までいる。

それは、本物なのか、何か似せて作られたモノなのかは、ニルヴァには分からない。

しかし、古代人たちは、ここに展示してある生物の器からだ封印を解き、戦かってきたのだ。

闇蜥蜴も、そうしたモノの一種だろう。

地上のどこかにある器を捜し、封印を解く儀式を始める。

そうすれば、精神や魔力といったものが、器に降臨し、使役することができる。

「どこまでも、動物ばかりっピ！」

今はもう、使われることがなくなった標本の中を、しばらく歩く。

ニルヴァは道具袋が、微かに震えているのを感じた。「ガラクタ」が反応しているのだ。

「ガラクタを集める者よ……」

声が聞こえたような気がする。

近くに蜥蜴がいるに違いない。ニルヴァは、辺りを見回した。

「お主らの目の前におるぞ……」

頭に直接響く言葉を、蜥蜴は発している。

「生きてるっピョ！」

並ぶ硝子のケースの中、一つだけ、瞳がこちらを見ている。

「われは、大地をつかさどる蜥蜴なり」

蜥蜴は、名乗る。

「これは、仮の姿、我はとうの昔にこの地に封じられたのでな。おぬしに話しかけるために、手ごろな器を借りたのだ」

「そ、そうですか……」

ニルヴァは、おおよそ蜥蜴とはかけ離れた獣の姿に戸惑いを隠せない。

「あの……」

ニルヴァは、口を開くが、蜥蜴はその言葉を遮る。

「おぬしの言いたいことは、分かる。しかし、この姿では、何もできぬ。」

我のこの忌まわしい封印を解いてくれたら、おぬしの望み、ガラクタを授けよう」

「どうすればいいのですか？」

「簡単じゃ、その光っている柱の前に立ち、呪文を唱えるのじゃ」

ニルヴァの頭の中に、不思議な言葉が流れてくる。

恐蜴が伝える言葉をニルヴァは言う。

ニルヴァが唱え終わると、今まで動かなかった器機が揺れ、光が走る。

どこかで、硝子の壊れた音がした。

この広い場所のどこかで、蜥蜴の本体が復活したのだろう。

先ほどまで、蜥蜴が借りていた生き物は、もう、魂の気配がしない。

どうやら、再び眠りにについているようだ。

「ちゃんと、封印が解けたっピ？」

「大丈夫だよ、きっと」

八・大地の光は、ときに翻り

「待たせたな、礼を言うぞ」

待つこと、数分。

蜥蜴が、すつと現れた。

「では、早速、ガラクタを授けよう」

蜥蜴の魔力が集まり、球形の物体が出現し始める。

その球の中には緋色の二重螺旋状の模様が作り出だされていた。

「これを受け取るがいい」

「これでやっと、ガラクタが集まったピヨ。よかったピ！」

フォーゼは手らしい器官を使い万歳の格好をした。

と、その時である。突然、蜥蜴が口から光線をはきだした。

「なっ？」

ニルヴァは、その強力な光に片目をつぶる。

蜥蜴の攻撃は、周りの硝子を次々に割っていく。

硝子の中で眠った動物たちは、空気に触れると、不気味な泡を体全体から出しながら、煙となって消えていく。

攻撃をかわし、その隙間から、赤い瞳を持つ黒い魔物が現れる。

そして、それは、宙に浮かぶガラクタに手を伸ばし、奪いさつて行く。

おそらく、魔王の手下であろう。いや、確実に魔王の手下だろう。

やはり、ガラクタを奪う隙をうかがっていたのだ。

蜥蜴は、再び光線で影に向かって攻撃をする。

「遅いわ！」

魔王の手下は、自慢の脚力で避けていく。攻撃は強力だが、動作が大きいのだ。

ニルヴァも、加勢しようと、魔王の手下を攻撃しようとする。
「待ちな！」

ニルヴァの殺気を感じたのか、手下は切り札を出した。その手にはフォーゼがいた。

「つかまっちゃったピィ……」

手下の爪の先でフォーゼは、すまなそうにその身を震わせた。
さすが、魔王の手下、やることが汚い。

「くくく、こいつの命が惜しければ、他のガラクタもよこしな！」
ありがちな三流の台詞をはく。しかし、効果はてきめんだ。

「ガラクタ入ったその袋、奪おうと狙っていたんだが、お前は中々隙を見せなくて、
困っていたんだ」

鋭い爪は、フォーゼを今にも、刺してしまいそうだ。

「……く、卑怯な」

ニルヴァは、しかたなく、従おうと決めたその時、まるで緊張感の無いフォーゼの声が響く。

「あ、そういえば、おいら……」

フォーゼの頭に、思い浮かんだ……というよりも、フォーゼは思い出したのだ。

「おいら、変形できったっピ」

フォーゼは、いつもにも増して、液状になり、手下の指からすり抜け、地面にしたり落ちる。

液状の生命体は、変化自在なのだ。

「わ、なあっ、何い！」

液体と化したフォーゼを手下はあわてて、再び、つかもつとするが、そのつかもつとする仕草が、
滑稽であった。

「今、おいらをとらえることができるのは、大きなコップくらいだっぴ」

床に水たまりのように溜まりながら、もはや原型の無いフォーゼは言う。

「実は、おいらは、すごいっぴ！」

人質がいなくなったことによって、ニルヴァはここぞとばかりに、手下に向かう。

しかし、手下は切り替えが早かった。

ニルヴァの殺気を感じると、フォーゼを諦め、回避の行動に移る。「俺様の使命は、戦うことではなく、一つでも、ガラクタを持ち帰ること」

手下は、あくまで冷静だ。

「それに…… 2対1じゃ、分が悪い」

「おいらもいるっぴ」

数に入れてもらえなかったことに気がつき、液体のままながら懸命に存在をアピールするフォーゼ。

（ごめん、君は、戦力外なんだ）

あえて、誰もそのことに、口には出さないその優しさ。

「とにかく、これを返して欲しくば、他のガラクタも全て持って、魔王城へ来い。ふっふっふ」

魔王の手下は、黒い風に包まれて、消え去った。

奪われてしまったガラクタ。

4つそろえるためには、もはや、敵の本拠地、魔王の城に行くしかない。

こちらにとっては、かなり不利にはなるが。

「どちらにしろ、魔王の元に行かなくてはいけないのだから……」

そう、闇蜥蜴の封印を解くのを妨害しに行くには、行かなくてはならないのだ。

ガラクタが真の姿になるのが、ココか、魔王城かの違いなのだ。

「そうだ、忘れないうちに……」

ニルヴァは、どうやら、鱗も貰っているようだ。

毎度毎度の行動に、フォーゼはもう何も言わなかった。

「それでは、我は、事の成り行きを見守ることにしよう」

そう蜥蜴が言くと、見えなくなった。

「蜥蜴つて、他人任せっパイ。そういつも思っっピ」

「蜥蜴はあくまで、ガラクタを持っているだけで、基本的に世界には干渉しないからね……」

攻撃するものには反撃を、崇める者には力を、そんな単純な存在なのだ。

八・大地の光は、ときに翻り（後書き）

ガラクタでも、リサイクルすれば意外な宝が隠されているかもしれません。

壊れたり、使わなくなった携帯、PC、カメラ……

それはガラクタですが、中に使われているレアメタルなんかは、ガラクタではなく、立派な宝。

都市鉱山に眠る宝なのです。

九・青い海と白い雲は、ときに渦巻き

海に浮かぶのは、亀の甲羅にも似た嶋。海に囲まれ、霧に包まれた嶋の都市。

ニルヴァの故郷は海上都市と言ってよかった。

木々の生み出す霧に包まれた生命力溢れるこの嶋は、今では魔王の本拠地となっている。

細波の立つ海は、見た目とは裏腹に危険に溢れている。

一步、海に入れば、それは襲ってくる。

それは海の蜥蜴であるが、この生物は、伝説上のそれとは、少し違う。

海に住む恐ろしい生物に対し人々が畏敬の意をこめ、蜥蜴と呼んでいるに過ぎない。

ニルヴァは故郷に行くために、秘密の道の入り口に立っていた。

道といっても、それは樹の根が造りだしたものである。

海を越えたところにある嶋に生えた巨大な樹々の根が海底を通りここまで伸びた。

そして長い年月が経つうちに根の中が空洞化したのだ。

ニルヴァは、再びここを通ることになるとは思ってもいなかった。

根のトンネルを抜ける頃には、日もすっかりと沈み、草木の寝息があたりを包んでいた。

その先に見えるのは、邪狗のいる神殿である。

全ての根源が、ここにいるのだ。

神殿に入るための門は固く閉ざされていた。押しても、引いても開きそうにない。

この扉を開くには、仕掛けを動かさなくてはいけないのだ。それは火を使った仕掛けである。

ニルヴァは火を、入り口左右に取り付けられたかがり火の燭台に燈した。

火さえ点ければ、自動的に扉は開くのだ。

ニルヴァは地下の一室で、定滑車や縄などが複雑に絡み合っているのを見たことがあった。

仕組みについては良く分からないが、火を起こす事によって空気の流れを変え、

地下を流れる大量の水を汲み上げ、水を重りの代わりに使って扉を開けているのだという。

そして、あの火が消えれば、水が再び地下深くに戻り、扉は自然に閉まってしまふのだ。

しかし、

「なにも、おこらないっピヨ」

フォーゼは扉を押したり引いたりしているが、動く気配はなかった。

ニルヴァも、首をかしげている。

「おかしいなあ……」

本来なら、これで扉が開くはずである。

少し経ち、二人が諦めかけていた瞬間、入り口の仕掛けが動き出した。

「入り口が開いたっピヨ。すごいピヨ」

実のところ、しばらく手入れをする人がいなかったなので、反応が鈍かっただけなのである。

一度動き始めたら、後は早い。扉は完全に開かれた。

扉が開く時の音は、かなり響くので、もう既にニルヴァとフォー

ゼの侵入に気づいているだろう。

「とうとうだね」

ニルヴァとフォーゼは、内部に潜入した。扉を抜けた内部は、暗いわけではない。

両側の灯りが、ニルヴァの動きに合わせてるように点いていく。

「おお、すごいッピョ」

フォーゼは、紫水晶のような瞳を輝かせながら火が点く度に感嘆の言葉を上げていた。

ニルヴァは、フォーゼの素直な反応に、笑いがこみ上げそうになった。

水に恵まれたニルヴァの故郷は、最先端の技術を使用した都市なのだ。

仕掛けの仕組みを知らない人々が訪れれば、それは立派な畏となり、

先に進むために解かなくてはいけない難問なのだ。

それゆえに魔王邪狗に狙われたのだろう。

しかし、ここの住人であったニルヴァにとっては謎でも何でもなかった。

多少、邪狗が配置したと思われる仕掛けを発見したが、急ごしらえのためか、作りは粗く、

子供のニルヴァでも簡単に発見でき、解除が出来た。

迷路というほど、複雑ではない建物なのだが、邪悪な気配に支配され、

押しつぶされそうな空間に気が滅入ってしまいそうだった。

ニルヴァ達が向かったのは、最上階にある部屋だ。

そこは、王様が座するような椅子が置いてある。

赤い絨毯の敷かれた高級かな触れるその部屋は、支配する者にとって重要な場所である。

魔王と自負しているのだから、当然そこにいるはずであった。
それが定番、世の中の法則とも言える現象だ。

子供だから通れる秘密の道を使用しつつ、最短距離で、その場所に着くことが出来た。

ニルヴァは意を決し、フォーゼと共に、重い扉を開く。

その部屋に差し込む月光が照明器具のように光線を発し、壁の模様を映しだしている。

この風景は、全く変わっていないかった。

懐かしい風景に、ニルヴァは涙が出そうになるが、ここはこらえる。

この部屋の奥に、ニルヴァの仇、邪狗が居た。

邪狗は笑みを浮かべ、豪華な椅子に座っている。

しかし、不釣り合いな豪華さの椅子に座っているせいなのか、遠くから見ているせいなのか、邪狗の姿は小さく見えた。

街などに行けば、一瞬にして、町の空気に溶け込み、存在感がなくなるような、そんな人物であった。

簡単に言くと、威圧感がないのだ。

魔力と知識で成り上がった、言ってしまうえば、ただの成金である。単なる闇蜥蜴の威を借る狗の状態である。

そのような頭でっかちの人物にこの故郷を占領されたのだ。

ニルヴァにはそれが許せなかった。

「邪狗、思い通りにはさせないぞ！」

「思ったよりも、早く着いたな」

ニルヴァの姿をみた邪狗は、悠長なことを言っている。

「どきどきするっぴい」

ニルヴァの陰から、フォーゼはいまいち緊張感の無い言葉を発していた。

こうして、最終決戦が、始まろうとしていた。

十・宵闇に降る雪は、ときに微睡み

「ふふふ、ガラクタの方からやってくるとは……」

ガラクタは、邪狗の手元の台座に浮かんでいた。

そのガラクタとニルヴァの持つガラクタが一つになった時、使用されるか、破壊されるか、どちらか一つの運命が待っている。

「残りのモノも渡してもらおうか」

「嫌だ。ボクは、それを破壊する」

ガラクタの状態では、何をやっても壊れなかったのだ。

（蜥蜴を刺すといった乱暴な行為をしても、傷一つつかなかった）
伝説どおり、四つ揃わないと破壊できないのだ。

ガラクタは、4つ全てそろい、本来の姿に戻してこそ意味をなす。
その点では、ニルヴァも、邪狗も変わりが無い。

「まあいい……力ずくで奪えばいいのだからな」

邪狗は、魔力を開放する。

ニルヴァは身構えたが、それは攻撃の魔法ではなかった。

「その身に隠された真実の姿を現せ！封印されし闇蜥蜴の器よ！」
その合図が、台座に浮かぶガラクタの魔力を開放させる。

その魔力にニルヴァの持つガラクタが俄かに反応した。
しまったと思った時には、遅かった。

懷から自然にガラクタが飛び出したのだ。

「ふはははは、やったぞ。闇蜥蜴よ、受け取るが良い」

集結した四つのガラクタが液状生命体のように不規則な動きを始め、

お互いにくっつき合い、形を創っていく。

それは、不思議な風景である。

固い鉱物であるはずの物質が、液体のように流動しているのだ。

ガラクタの融合が始まったら、それが終わるまで、もう誰にも止められない。

そして、遂にそれは、一つの蜥蜴の像となった。

「くくくくくく……」

どこからともなく響く笑い声。

邪狗の背後に影が現れる。それは、きつと闇蜥蜴の精神。

「邪狗よ、いままで、ご苦労であったな。とうとう、私の復活の時だ。くくく……」

蜥蜴の像は黒く輝いている。

ガラクタからあふれ出る闇。

光をも飲み込んでしまいそうなほど、深い深遠な暗闇。

「ふはははは、素晴らしい力だ！」

邪狗は絶頂を極めている。

もう、世界を手に入れたも同然なのだ。

「闇蜥蜴、復活しちゃうピヨ？」

「……」

「もう、貴様に用はない」

しかし、突然。像からあふれ出た闇が、邪狗を取り込もうとする。

「な、何をする！」

あっという間に闇に囚われ、もがく邪狗。

「まずは、目覚めたてで、空っぽな私のために、その身をささげてもらおうか。」

「光栄だろう？くくく」

「な、約束が違うぞ」

闇に染まったものは、闇に良くなじむ。

邪狗と影とが、一体化しようとしている。

「な、何が起こったツピ？」

「……邪狗は、利用されただけ。今はもう用がなくなったから……」
今まで仇だと思っていた奴が、利用されるだけされて、目の前であっけなくやられていく、それは哀れみというのか、虚無感と言うのか……？

その様子を冷静に見ている自分が不思議でならなかった。

「おいらたちも、食べれちゃうツピ。もう、おしまいだっピィ……」

「いや……まだ、希望はあるよ」

ガラクタは、破壊できなかったものの、今の闇蜥蜴ならば、まだできるかもしれない。

感情は停滞していたが、思考は止まっていけないようだ。

「もう一度、闇蜥蜴を封印するんだ」

「そんなこと、できるツピ？」

「……わからない。でも……」

今がチャンスかもしれない。

生き物は、その差はあれ、食事時にはどこか無防備になる。

邪狗は、抵抗しているようなので、時間は多少稼げるだろう。

「……やらないよりは、挑戦した方が、悔いはない」

ニルヴァは、ニルヴァは、道具袋から蜥蜴の鱗を取り出す。

「それは、鱗ッピ?」

「そう。ボクがこれをやって、成功するかは分からないんだけどね……」

今ここで、4匹の蜥蜴の鱗を媒体に使った封印の儀式を、発動させるのだ。

ニルヴァは、闇蜥蜴復活の鍵である4つのガラクタの搜索以外にも、

闇蜥蜴を封印するための魔法についても、同時に遺跡で探していた。

遺跡で本物の蜥蜴を目の前にしたとき、咄嗟にその鱗を使うことを思いついた。

この選択は間違ってはいなかった。

水、風、土、火というような魔力四大元素エレメントを集めることが出来たのだ。

最終手段にと、集めていたのだが、今となっては、何よりも良い媒体になるだろう。

この機会を逃したら、ここにいる者たちでは手も足も出ない。

「……いくよ……」

「やるしかないッピ!」

ニルヴァは、深呼吸する。

呪文の目星はついている。

それは、たくさんの蜥蜴関連の遺跡を廻ってきた成果である。

ニルヴァは、眼を瞑る。

・嶋の子ニルヴァは、ここに命ずる。封じられたその魔力を開放せよ・

呪文の一節に反応し、鱗は一斉に煌きだした。

水蜥蜴の鱗は蒼の炎へ、

風蜥蜴の鱗は翠の炎へ、

地蜥蜴の鱗は碧の炎へ、

火蜥蜴の鱗は紅の炎へ、

4色の煌きへ変化し、ニルヴァを中心として、回り始める。

暁闇の中、白銀の粉が舞い始めた。

降り始めた季節外れの雪がニルヴァの頬に当たり染み込む。

ニルヴァの詠唱に気がつき、闇蜥蜴は、闇の触手を生成する。
「危ないッピョ！」

フォーゼは注意を促すが、しかし、ニルヴァは動こうとしなかった。

一度始めたら儀式は途中では止められないのだ。

果たして間に合うのだろうか。

全ては、一瞬で決まるのだ。

全ては、これで決まるのだ。

ニルヴァは焦らず呪文を続ける。

雪風の中でニルヴァは、目を開きながら最後の一節を唱えた。

、
邪悪なる因子の核に働きかけ、その時を止めよ、
封印という名の凍りついた記憶の世界へ……、

ニルヴァは、目を開き、闇蜥蜴と取り込まれた邪狗を指さした。

四つの炎は大きく螺旋を描き闇を包み込む。

闇蜥蜴と接触した瞬間、身体中の皮膚に鳥肌が全開するような鋭

い音が響いた。

その封印魔法の……鋭い時の残像のみが、いつまでも宵闇の空間を駆け巡っていた……

完・霧を生む森林は、ときに輝き

闇蜥蜴は、再び封印された。

「仇は、取ったよ……」

眼前には大地に芽生えた一つの樹がそびえ立っている。

ニルヴァの故郷を守る樹である。

根元には、子供の頃、ニルヴァの刻んだ傷がある。

ニルヴァはそれに手を触れた。

もう何を刻んだのか朧にしか見えない。

楽しかった思い出を刻んだこの傷も、いつかは消えてしまっただろう。

しかし、ニルヴァは覚えている。

ニルヴァは、目を閉じた。

今も、まだ降り積もる優しい雪。

全てを覆い尽くす純白の魔法。

雪の積もった白い大地。

今日も、冷えそうだね。

母さんの優しい声。

暖炉に火をつけましょう。

ゆらゆらゆれる、赤い炎。

いつまでもここに居るわけにはいかない。
仲間が、フォーゼがそこで、待っている。

おや？もう、行くのかい？

気をつけるんだよ？

元気でいくんだよ？

樹々の葉達の囁きを後に、ニルヴァは再び旅立ちを決意する。

「行ってきます」

霞の舞う風景の中、ニルヴァは歩き始めた。

太陽の昇りかけた空は、ほんやりと黄ににじみ始めていた。

完・霧を生む森林は、ときに輝き（後書き）

故郷が滅ぼされ、4つの秘法を集めつつ、魔王を倒すために旅立つ。そういう、いわゆる王道系なものを書いてみたくて、挑戦中。

コメディ方向へ行き過ぎないように気をつけつつ、書いてみましたが、いかがでしたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8649h/>

闇蜥蜴《やみとかげ》【改定前版】

2011年11月16日10時56分発行